

【別紙】

令和7年度 第三者評価における校（園）長所見

評価結果を受け、補足説明や改善方策等、今後の方向性について記入してください。

今回の第三者評価において、本校の教育活動全般に対し多くの肯定的な評価をいただいた。特に、学習活動案の改善や掲示物の整備、教室環境の工夫など、日頃から全教職員が取り組んできた学習環境づくりが着実に成果をあげている点が評価された。一方で、黒板周りや教員机付近に整理すべき点が残るとの指摘を受け、環境整備の徹底に向けて改善の必要性を再認識した。

また、グループ型座席について「学習内容との適合性を検討する必要がある」との指摘を受けたが、これは本校がめざす学習時間観と、評価者の見取りとの間に認識のずれがあったものと捉えている。現在、一部の学習時間が依然として教員の話を聞き、挙手で答える「一問一答型」の構造に留まっている場面があることが、座席配置の価値を十分に伝えきれなかった背景にあると考える。本校がグループ型座席を採用している理由は、教員の発問を合図に、子どもたちが互いの考えに自然に耳を傾け、対話を通して学びを深めていく学習時間風景をめざしているためである。座席形態そのものではなく、そこに生まれる“子ども同士の学び合い”が本校の目指す姿であり、今後はその価値が伝わる学習時間改善をさらに推進していく。

児童については、落ち着いた雰囲気の中で主体的に学ぶ姿が見られ、「みどり」を中心とした不登校支援・特別支援の取り組みが確実に機能していることが示された。これは、本校が重視している「安心して学びに向かえる環境づくり」が確実に根づいてきた証であり、今後も継続して取り組んでいきたい。

学校経営面では、「子どもが主語になる学校」を掲げた改革の先進性が認められ、管理職・主幹教諭層、PTA の理解が進んでいる点が評価された。一方で、宿題・通知表改革については一部に理解が十分ではない状況があり、「不易と流行」を踏まえた丁寧な説明や対話の必要性が指摘された。学校文化としての定着には、こうした声と誠実に向き合いながら進めることが欠かせない。

改善方策として、①学習環境整備の基準の明文化、②グループ型座席の価値を体現する学習時間改善、③「みどり」を中心とした特別支援体制の充実、④宿題・通知表改革における保護者への丁寧な情報提供と対話と実践を結びつける教職員研修の継続を進めていく。

中長期的には、児童の意思決定の場面をさらに広げ、「子ども主語」の学校文化を一層深めるとともに、「思考力と基礎基本の両立」という本校の学力観を明確化していく。また、PTA や地域との連携を高めながら、学校の取組が正しく伝わる情報発信に努めていく。

今回の評価は、本校の教育の方向性が確かな成果を挙げつつあることを示すとともに、今後の改善への示唆を与えてくれた貴重な機会である。いただいた指摘を真摯に受け止め、子どもたちにとって最善の学びと育ちを保障する学校づくりを、教職員・保護者・地域とともに進めていく。

墨田区立第三吾嬬小学校 校長 川中子登志雄